



すべてが人馬の力でまかなわれていた当時の苦勞に想いを馳せたい。

知られざる手稲の意外な一面が見えてくる

西区

ていねきねんかん 手稲記念館

教育にも力を入れた片倉家臣団

昭和42年(1967)に手稲町(現在の手稲区と西区の一部)が札幌市と合併したことを記念し、手稲のあゆみを伝える資料館として2年後に開館した。

同館では手稲の昔の様子や、手稲遺跡からの出土品や古文書、生活用具などの歴史資料が多数展示されている。

明治5年(1872)、上手稲(当時は発寒ベッカウス=現在の西区西町および宮の沢付近)に、旧仙台藩・白石城の片倉小十郎邦憲の家臣団47戸(241人)が移住した。この時、共に片倉家から札幌を目指したのは

600人余であったが、そのうちの380人は白石村へ、241人は手稲村へと、開拓使の指令に従って二手に分かれて定住した(21ページ「白石郷土館」本文も参照)。上手稲は石が多く痩せている上、用水確保も困難という悪条件の土地であったが、血のにじむような努力で開墾に挑み、養蚕や果樹栽培も盛んに行われたという。

片倉家臣団は子弟教育にも力を入れ、移住とほぼ同時期に白石には「善俗堂」、上手稲には「時習館」という教育所をそれぞれ設立。視察に訪れた開拓使の松本十郎判官がいたく感心し、帯刀の武士が鋤で開墾をしている姿を描いた掛け軸を贈って彼らを

コレも見どころ

手稲の消防のあゆみを伝える

豊富な展示資料の中で目を引くのが、昭和2年(1927)に軽川消防組(現在の手稲消防団)が購入したという「ガソリンポンプ車」である。それまでの手押しポンプに比べ、20馬力のガソリンエンジンで水をくみ上げて放水する力は段違いに強力で、消防活動ではいつも大活躍していたという。昭和30年代頃の消防士の装備も展示されており、現代との違いに驚かされる。



激励した。同記念館では時習館に贈られた掛け軸が展示され、塾頭であった三木勉の功績を称えている。

また、手稲のあゆみには意外な側面もある。展示されている鉱石標本は、かつて金銀銅などが採れる鉱山として活気に溢れていた手稲山から採掘されたものだ。

明治20年代半ばから試掘が繰り返され、昭和から本格的に鉱山事業が開始。昭和10年(1935)には三菱鉱業が手稲鉱山の経営に参入し、最盛期には月産5万トンの金銀

銅の原鉱石を産出した。東洋一の金山と呼ばれた鴻之舞^{こうのまい}鉱山に次ぐ産金量を誇った時期もあったが、次第に減少し、昭和46年(1971)に閉山した。



手稲鉱山から産出された金、銀、銅、鉄などの金属を含んだ鉱石の数々。



開拓使判官が「時習館」の塾生に贈った掛け軸。白石の「善俗堂」へ贈られたものと対になっている。

住所：西区西町南21丁目3-10
電話：011-661-1017
休館日：火・木・日曜、祝日、年末年始
観覧時間：9:00～17:00
アクセス：地下鉄東西線「宮の沢」駅
5番出口から約560m
資料収蔵数：約1,130点
開館年：昭和44年(1969)